

2020年9月

ドル円

1日、105円85-95銭水準で始まった。その後、ユーロやポンドなどの欧州通貨に対するドル高が波及、3日、欧州市場では106円台前半から106円55銭まで上昇、今月の高値をつけた。ただ106円55銭が上値の目処として意識され106円台前半で推移していたが、8日、欧州株安や米株価の大幅続落を背景に105円87銭まで下落した。ただ値ごろ感から買い戻す動きも見られ、106円00銭近辺で終始していた。14日、FRBの低金利政策が長期化するとの思惑から105円55銭まで下落し、15日には105円30銭まで軟化、16日、FOMC声明において事実上のゼロ金利政策を長期化する方針が改めて示されたため、104円80銭まで値を下げた。17日、FRBの低金利政策が長期化するとの思惑から104円53銭まで下落し、18日には104円27銭まで下落した。21日、欧州で新型コロナウイルスの感染が再拡大、欧州主要株価や米株価指数先物は大幅安となり、リスク回避から104円00銭まで下落して今月の安値をつけた。しかし、ショートカバーが入り月末に向けては105円台まで上昇、25日、欧州の景気減速を警戒したユーロドルのユーロ安・ドル高が波及、105円70銭まで上昇した。30日は105円40-50銭水準で今月の取引を終えた。

財務省が発表した8/28~9/28の外国為替平衡操作状況によると、108カ月連続で介入額ゼロ円となった。

ユーロドル相場

今月は1日、1.19ドル台前半で始まった。前月からドル売りが継続する中、LDN、NY市場で約2年4ヵ月ぶりとなる今月高値1.2014ドルをつけた。しかし8月米ISM製造業景況感指数が予想を上回ると、利食い売りなどに押される展開となり、1.19ドル台前半へ下落した。翌2日に1.18ドル台前半、3日には1.17ドル台後半まで下落した。9日、翌日にECB理事会を控え上値の重い動きが続き1.1753ドルをつけた。しかし一部メディアが「ECB理事会でGDP伸び率が上方修正される可能性」との報道を受け、1.18ドル台前半へ水準を切り上げた。10日、ECB総裁のユーロ高容認ととれる発言でユーロ買いが強まり、1.19ドル台前半まで上伸した。その後、利益確定や戻り待ちのユーロ売りが入り、1.18ドル台前半へ下落する荒い動きとなった。

16日、FOMCイベントを無難に通過したため、材料出尽くし感が広がるなかで1.17ドル台後半、翌17日には東京市場で1.17ドル台前半をつけた。しかし再び1.18ドル台半ばまで値を戻した。21日、ラガルトECB総裁がユーロ高を懸念するような発言をし、1.17ドル台前半へ下落した。翌22日、欧州で新型コロナ

ウイルス感染が再拡大しているため下値を模索する展開となり、1.16 ドル台後半をつけた。25 日には、NY 市場で今月安値 1.1613 ドルまで下落した。29 日、9 月ユーロ圏景況感指数が予想を上回ったこともあり、1.17 ドル台半ばへ水準を切り上げた。月末 30 日は、1.17 ドル台前半で今月の取引を終えた。

ユーロ円相場

今月は 1 日、126 円台半ばで始まった。ユーロドルの上昇に連れて、LDN、NY 市場で約 1 年半ぶりとなる今月高値 127.06 円をつけた。しかし、ユーロドルが一転下落すると 126 円台前半、3 日には 125 円台前半まで下落した。9 日、124 円台半ばまで下落したものの、欧米株高や NY 原油先物相場の反発がリスク選好の円売りを誘い、125 円台半ばまで回復した。10 日、ECB 総裁の記者会見を受けてユーロ買い・円売りが先行、126 円台半ばまで急伸した。その後、ポンド円の急落や米株価の大幅安でリスク回避の円買いが入り、125 円台前半へじり安となった。

15 日、円買いが優勢となり 124 円台後半、17 日には 123 円台前半へ下落した。21 日、ユーロ圏でのコロナ感染拡大に加え、欧米株価の急落を受けて 122 円台半ばへ下落した。25 日まで上値が重く、122 円台後半から 123 円台前半で推移した。28 日、TKY 市場で今月安値 122 円 39 銭をつけるも、欧米株高を好感し 123 円前半へ水準を切り上げた。月末 30 日、アジア時間に 124 円台前半で上値の重さを確認したことから、利益確定などのユーロ売り・円買いに押される展開となり 123 円台半ばで今月の取引を終えた。

豪ドル

今月の豪ドルは 1 日、RBA が政策金利と 3 年国債利回りの誘導目標を 0.25% に据え置くと発表した。同時にタム物資金調達ファシリティの規模拡大と 2021 年 6 月までの期間延長を発表したが相場への影響が限定的だった。しかし、FRB の低金利政策が長期化するとの見方から米ドルが売られると月間高値 0.7412 まで上昇した。2 日は発表された 4-6 期豪 GDP が予想を下回ったことで豪ドルは売られて 0.7301 まで下落した。4 日に発表された 8 月米雇用統計で雇用情勢が改善している結果が好感され、米ドルが買われたことで 0.7222 まで下落した。8 日は欧州通貨や資源国通貨に対して米ドルが全面高となったことで 0.7211 まで下落した。16 日の FOMC では 2023 年まで利上げなしとの見通しとなるも、2023 年に 4 人が利上げを望んでおり、インフレ見通しも今年から 2022 年にかけて上方修正されたことを受けて 0.73 台まで反発した。17 日に発表された 8 月豪雇用統計の良好な数字を受けて 0.73 台で推移した。21 日は欧州株や時間外ダウ先物の下落を受けてオセアニア通貨や新興国通貨が売られ豪ドルは 0.7200 まで下落した。22 日に RBA のデベル副総裁が「国際の購入、為替介入、利下げ、マイナス金利導入」の 4 つの選択肢を検討中と述べ、追加緩和観測が高まったことで 0.7155 まで下落した。25 日にペロシ米下院議長とムニューシン米財

務長官が追加景気対策の妥協案について協議再開に前向きな姿勢が伝わると、米ドルは買われて月間安値 0.7006 まで下落した。30 日は 0.7163/65 レベルで取引を終えている。

英ポンド

今月のポンドは 1 日、FRB の低金利政策が長期化するとの見方から米ドルが売られたことで月間高値 1.3481 まで上昇した。2 日に発表された 8 月米 ISM 製造業景況感指数が予想を上回ったことでドルが買われて 1.3284 まで下落した。4 日に発表された 8 月米雇用統計で雇用情勢が改善している結果が好感され米ドルが買われたことで 1.3176 まで下落した。8 日は英国が EU と FTA を終結できないまま、年末までの移行期間の終了を迎えるリスクを意識したポンド売りが入り 1.2980 まで下落した。10 日は EU との対立を警戒したポンド売りが一段と強まり 1.2773 まで下落した。14 日は 15 日～16 日に開催される FOMC で FRB が改めて低金利政策の長期化を確認するとの見方からドルが売られて 1.2920 まで上昇した。16 日に 8 月英 CPI が予想を上回ったことから英イングランド銀行の追加緩和観測が後退したことで 1.3008 まで上昇した。21 日に英政府が 22 日にも規制の再強化策を発表すると伝わったことから、国内経済の先行き懸念が意識されたことで 1.2776 まで下落した。22 日にジョンソン首相が規制の再強化を発表したことが嫌気され、2711 まで下落した。23 日に発表された 9 月英 PMI の低下を受けてポンドは売られて月間安値 1.2676 まで下落した。28 日に英国と EU が 29 日から再開する将来関係を巡る協議で交渉の決裂は回避されるとの期待が高まり 1.2930 まで上昇した。30 日は月末に絡むポンド買いのフローが入ったことにより 1.29 台で推移して 1.2922/26 レベルで取引を終えている。

中国人民幣

今月の USDCNH は 6.84 台で始まった。7 日にトランプ大統領が中国で事業を行う米国企業に対する課税を主張するなど、米中対立悪化を懸念した元安となった。9 日には今月の高値 6.8580 を付けた。中旬に入ると、15 日に発表された中国国内の指標が良好な結果となり、人民幣が買われる展開となった。17 日には今月の安値 6.7420 を付けた。月末にかけては、国慶節前のフローなどを受けて USDCNH は上昇し、6.81 台で今月の取引を終えた。

タイバーツ

USDTHB は 31.05 近辺で始まった。2 日はタイ政府が、8 月に就任したプリディ財務相がわずか 1 ヶ月で辞任を表明したことで、バーツが売られる展開となる。その後もバーツ売りの流れを引き継ぎ、USDTHB は 31.30 後半で週の取引を終えた。月の半ばには、中国の経済指標が好調であった事からバーツに買いが入り、15 日には 31.20 台に下落した。17 日には FOMC 後のパウエル議長会見で、低金利が 2023 年末まで続く見通しが示され、ドル売りが優勢となり 31.10 台まで値を下げた。19 日には総勢 5 万人規模となる反政府集会が行われた。しかし、武力衝突が無く終わったことへの安心感からバーツが買われ、21 日には今月の安値 30.94 を付けた。23 日にはタイ中銀が、2021 年の経済見通しを下方修正した事によりバーツ売りが進行した。28 日にはタイ国内の緊急事態宣言が 10 月まで延期される事が発表されて USDTHB は今月の高値 31.75 を付けた。その後は 31.60 台で推移して今月の取引を終えた。

シンガポールドル

USDSGD は 1.36 台で今月の取引が始まった。月の始めはそれほど大きな値動きはなかったが、14 日に新型コロナのワクチン開発関連のヘッドラインが好感された事で、SGD が買われる展開となった。15 日発表された中国国内の指標が良好だった事も、SGD 高を加速させて 1.35 台前半を付けた。21 日には欧州で新型コロナの感染が再拡大したことが影響し、USDSGD は今月の安値 1.3544 を付けた。23 日にはシカゴ連銀総裁が「インフレ率平均 2%前の利上げはあり得る。」と発言したことから USDSGD が上昇する展開となる。25 日には今月の高値 1.3792 を付けた。その後は 1.37 台前半を推移して今月の取引を終えた。